#### 法政大学学術機関リポジトリ

#### HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

#### 〈書評〉長尾正憲著『福沢屋諭吉の研究』

#### 宇佐美,ミサ子

1989-03-24

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
41
(開始ページ / Start Page)
83
(終了ページ / End Page)
86
(発行年 / Year)

『福沢屋諭吉の研究』(宇佐美)

#### 

### 長尾正憲著

# 『福沢屋諭吉の研究』

## 宇佐美ミサ子

研鑽の労に深甚の敬意を表したい。る。まずはじめに後学のわれわれにとって、著者の長年にわたるる。まずはじめに後学のわれわれにとって、著者の長年にわたる福沢諭吉に関する研究成果をまとめて世に問われた論 文 集 で あ本書は著者が本学大学院時代から一貫して取り組んでこられた

期出版事業に手を染めたことは一般には知られておらず、筆者も入するに際して名のった屋号である(第Ⅱ部第一章)。福沢が一時版・販売するために、明治二年(一八七○)に書物問屋仲間に加屋論吉の研究』と題される書は少ないように思 われる (・印筆屋論古の研究』と題される書は少ないように思 われる (・印筆屋論古の研究』と題される書は少ないように思われる(・印筆屋論古の研究』と題される書は少ないるが、本書のように『福沢ところで、福沢論吉に関する研究は、従来多くの研究者によっところで、福沢論吉に関する研究は、従来多くの研究者によっ

て出版事業家としての福沢の側面を捉え、「企業経営者福沢諭吉」資料・文献を余すところなく消化され、精緻な分析方法をふまえ(一八八二)『時事新報』発刊に至るまでの約三〇年間の生活と事に緒方洪庵の適塾に入り蘭学を研究した時期から、明 治 十 五 年本書は福沢諭吉(一八三五~一九〇一)が安政二年(一八五五)

著者の学会報告で初めて知った。

第-部「幕臣」福沢の形成・発展過程の章別構成は以下のようである。

第一章 幕未洋学史における適楽の地位

第二章 安政期海防掛の制度史的考察

江戸幕府は開国にどのように対応したか。

専門第一届尺り幕号出土この、C第三章 外国奉行支配通弁方・翻訳方の一考察

第四章 福沢の幕府出仕について

第五章 福沢諭吉の政治思想形成過程

第六章 幕臣福沢諭吉の政治思想発展過程---文久渡欧との関連として---

---『西洋事情』成立の背景-

第一章 「福沢屋論吉」の生成過程第『部「福沢屋論吉」の生成・発展過程

第四章 明治二年の出版条例成立と福沢諭吉第三章 福沢の著作権思想の種本と偽版問題

福沢屋諭吉」の発展・転換過程

福沢における出版社・著者・読者の関連明治十四年政変と『時事新報』創刊

第五章

第六章

八三

## ——出版社会史側面—

第Ⅲ部 福沢諭吉の西欧体験

〔史料〕福沢論吉『西航手帳』の粛文記事第一章 福沢論吉『西航手帳』の谢文記事

(二章 現地新聞より見た文久遺欧使節団のオランダ滞在〔付録〕『西航手帳』の記事概要

〔史料〕シーボルトの一八六一年蘭文日記――福沢の外交書翻訳と渡欧との関連として-

シーボルト文久元年日記について

明したものである。

面から検討された。まず、先行研究をふまえて新たに乙骨彦四郎置づけを明確にされた。第二章では安政期の海防掛を制度史的側幕末洋学に果たした役割、すなわち適塾の幕末洋学史における位課程・塾風・塾生の階層・地域性・特徴について検討され適塾の築かれていった過程を明らかにする。まず適塾の開塾から、教育築かれていった過程を明らかにする。まず適塾の開塾から、教育等に発展を論じ、福沢の人間形成を培ったといわれる適塾の第一部第一章では、福沢の人間形成を培ったといわれる適塾の

想がどのように形成され、国内の「攘夷旋風」の中で、変質して 第に政治に対する問題意識を持ちはじめ、 程を明らかにする中で、主要スタッフである人物の経歴を追い、 年の研究の蓄積である幕末外交制度の一貫をなすものである。 を詳述したもので、 体験の見聞・探索の結果があり又その体験は「富国強兵」願望の と「人材教育」があるとしてその必要性を強調した過程には西欧 て究明された。前章では福沢の渡欧前と渡欧中・帰国後の政治思 程を明らかにし、『西洋事情』執筆に至るまでの政治的背景につい れ注目したい。第五章~第六章では福沢が文久渡欧使節として次 福沢が次第に国際的視野を広げていく過程が具体的に明らかにさ 再構成する。とくに通弁方福地源一郎・箕作貞一郎らとの関係で て詳述されている。本章は安政期の海防掛体制を通して著者の永 係の組織・職制・機能を明らかにし、安政期の海防係体制につい の残した『乙骨耐軒文書』の中の海防に関する史料を中心に海防 ての素質を明らかにされた。 ジャーナリスト的感覚を身につけ翻訳家からすぐれた著述家とし 福沢が展開した時務論の執筆活動を検討し、『西洋事情』成立まで 政治思想を形成する契機でもあったとする。 いくかを叙述する。福沢が経済力・軍事力の基本に「洋法の採用 福沢との協力関係や個々の事象を通して「幕臣」福沢の人間像を 三章〜第四章は通弁方・翻訳方・書物方の形成から確立に至る過 福沢の「情報」の収集・整理を通して次第に 政治思想を形成する過 後章では、慶応期に

文化に深い関心を示し出版業自営に乗り出したこと、しかも慶応次に第Ⅱ部第一章~第二章は福沢が「福沢屋諭吉」として出版

部は以上であるが、ここでは企業家としての福沢の実像に せ えられ大変興味深い叙述であった。 係を探り、三者は一体関係にあってこれがまた大きな特徴をなす ところにあったとする。第六章は福沢の出版者・著者・読者の関 から「独立不羈」という新聞の独立性・中立性の価値を学び得た を明らかにされた。 この間の福沢の新聞発行計 して福沢が純民間新聞『時事新報』第一号を発刊するに至るまで 日誌社設立を準備したが十四年政変によって流産してしまった。 では『法令公布日誌』を福沢がその発行引請けを要請され、 時の福沢のジャーナリストとしての活動を詳述された。 第五章では、明治十四年の政変の歴史的意義と『時事新報』創刊 蒙思想家」としての姿勢を堅持していたことを強調されている。 化・実効化を公権力に勧告要求するのに実務家であるまえに「啓 翻訳書を一連の体系としてまとめあげたこと、著作権保護の法制 らえた著作権「知識」を著作権「思想」にまで止揚させたこと、 的に対応していく「実務家」としての福沢について明らかにされ 章は福沢が出版業を経営するにあたって著作権・偽版問題に積極 論人・経済人としての福沢の実像に肉薄している。 義塾創設とのかかわりについて指摘し、 近代化を促進するための福沢の合理主義的側面が見事にとら しかしここでは単なる実務家ではなく「翻訳」という作業か 福沢の出版活動に果たした役割を明らかにされた。 新聞人としての福沢の成功は明治十四年政変 画と、 政府の『官報』発行の経緯、 出版業の活動を通して言 第三章~第四 ますこと 第Ⅱ ¥ そ

第■部第一章~第三章とも福沢の西欧体験を中心に論述され、

『福沢屋諭吉の研究』

し紹介されている。 し紹介されている。 し紹介されている。 し紹介されている。 し紹介されている。 し紹介されている。 し紹介されている。 し紹介されている。 し紹介されている。 しにのいて全文紹介され、第二章では文久 といわれる『西航手帳』について全文紹介され、第二章では文久 といわれる『西航手帳』について全文紹介され、第二章では文久 使節として長期にわたる西欧体験で、西洋への開眼をもたらした は紹介されている。

情熱・心情をおしはかることが出来るのである。最後に福沢は三 しているのであろうと考えられるが、近代化促進にかける福沢の わめて印象的であった。これは福沢の現実的合理主義が基底をな たそれは慶応義塾の教育活動との関係で解明されていることがき 面が「福沢屋」という出版業を媒介として浮彫りにされ、 ある。従来あまり触れられなかった福沢諭吉の企業家としての側 沢の知られざる側面から福沢の「実像」が明らかにされたことで 鼎氏は『週刊読書人』(一九八八・一○・一七) で本 書 を「わが ともいらべきものであり畏敬の念を禁じ得ない。第二の印象は福 いるが、まさにその通りで著者の学問研究に対する誠実さの結実 密さ」と「その渉猟の広さ」は他に「類をみない」と述べられて 国の実証史学が生み出した秀れた成果」と評され「史学探索の厳 法によって、より正確な論証を展開されていることである。 集にさいたエネルギーとそれを駆使されての綿密な実証的分析方 『幕末外国関係文書』をはじめ、多岐にわたる膨大な文献、 ったが、全体を通読した第一の印象は著者が『大日本古文書』の 以上、紙数の関係もあり、きわめて不充分な内容の紹介に留 かつま

がかりとして貴重なものであろう。史料的に大変意義深く今後の れたことで帰国後の福沢の政治に対する見解、思想形成を知る手 外交史の研究に大いに裨益するものと考えられる。 福沢のメモともいうべき『西航手帳』によって具体的に明らかにさ 回にわたって渡航しているが、文久遺欧使節としての望欧体験が

け、著者の学問に対する真摯な姿勢に衷心より御祝詞を述べたい からであった。 に精進されてきた。この学問的情熱に対し筆者は大なる刺激をう いるように、著者は四十代後半に本学大学院に入られ、研究一途 き受けしたのは、著者が「あとがき」に自ら「晩学」と記されて 寛恕蔑きたい。近代史の専門家でもない筆者があえて書評をお引 以上、ご労作に対し非礼をも顧みず貧しい読後感を記したがご

索引一八頁、思文閣出版 [一九八八年七月十五日発行、九八〇〇円。本文五六〇頁、写真二葉人名 向後、永く後進の御指導を願い筆者の拙い書評にかえたい。

岩松大 壁平久 条乗

義光解説 乗目謙監修

山本

光正著

『武家文書の研究と目録(上)』

『成田街道』

芥川

龍男編著

『日本海地域史研究』第八輯

『江戸幕府八王子千人同心』

【会員編著書抄】 村上 直共編

『藩史大事典』北海道・東北編 『藩史大事典』九州編

村上

直編

雄山閣 雄山閣

昭 63 昭 63

文献出版 雄山閣

昭 63

昭 63

お茶の水図書館

昭 63

聚海書林

昭 62

毎日新聞社 昭 63

湯本豪一共編

『黒船来航譜

開港への序曲』

『明治漫葉集

文藝春秋 平 1 八六